へ13
3689
24

門へ13
號3689
巻24

卯の春

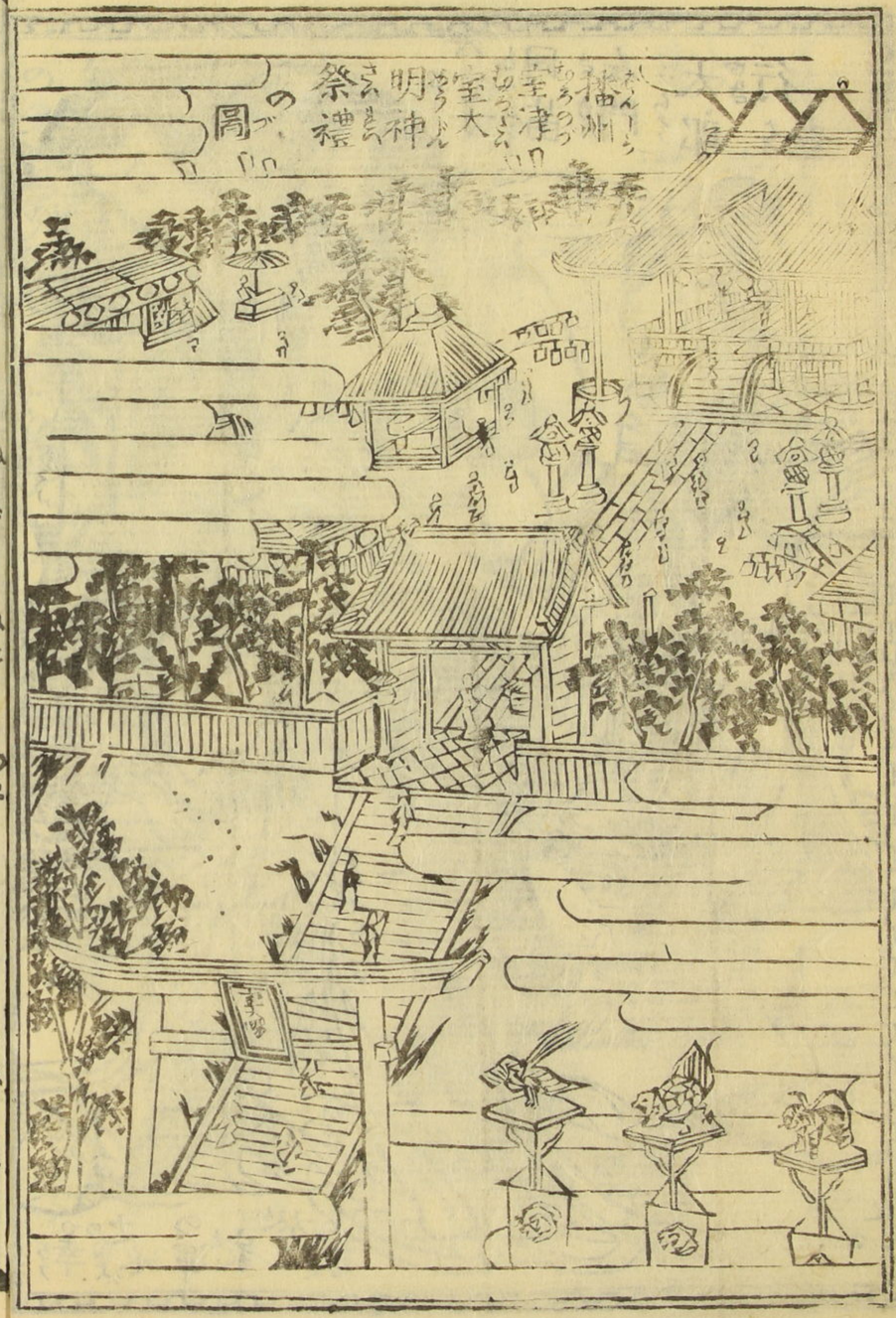
金花七変
化け四輯
上の書

志つ賀作
國貞画
辻文板

□穐の秋は月新さんもいろ事で明く照流へば。
□吉人も言ふ我営し無れど虫乃青のおのがさゑぐ
□おぼめきなりぶ我は夏の紀に初原の一軒二軒で
□渉る都面白き裡にも松風の浦渡しく燃の
□小に華我採れど其の愛筆も深まりぐ画解に
□其秋我明に夏さんを見れど好める居とて左のみ
□苦しとは思はざれど有頼に沿の日を抱きくいぎ
□さなくも起出蕪て有極に僕一人の小猫と閑室なる
□に松の下まで鈴我明に戯狂れ渉に眠まる我
□竟に打しも何れ金華猫の沿筆と雲金松堂より

梵論寺
皆空
實ハ伊村
幸之丞光忠
海賊の首領
鰐淵惡左衛門
實ハ
大内家の元臣
撫島
外記
の
鰐淵の
手下
龍の
三八

二子
同苗
左門
太郎
行春
幸之丞
の
渾家
於菊

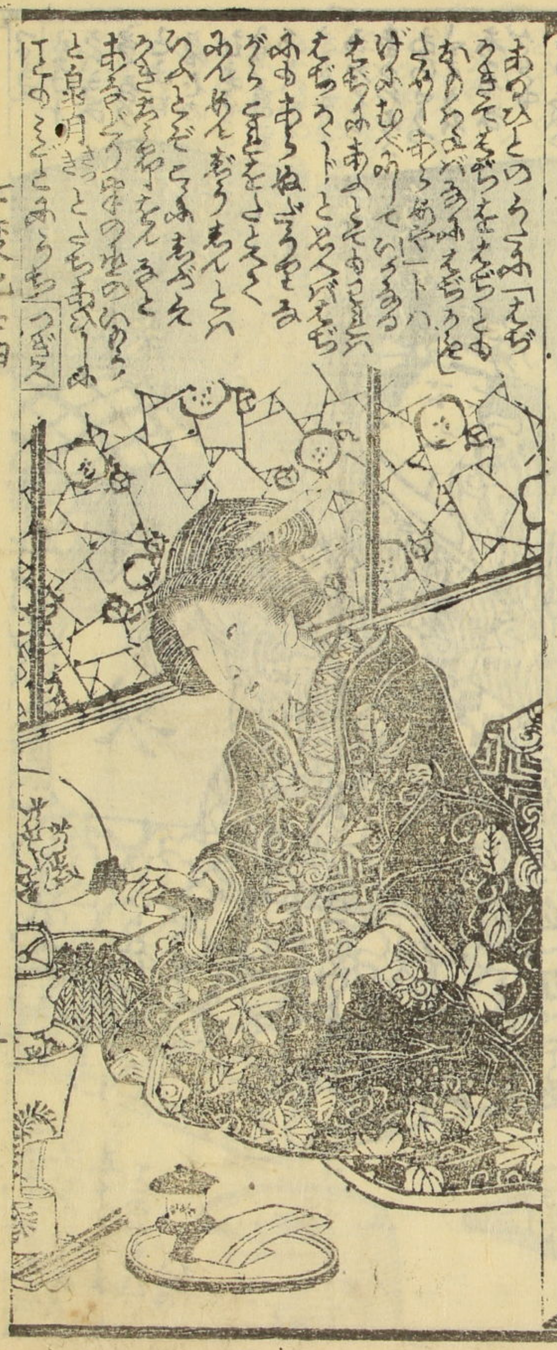


□せめてうがゐれ。まゑが猶よ起しけれて。金華と猶の

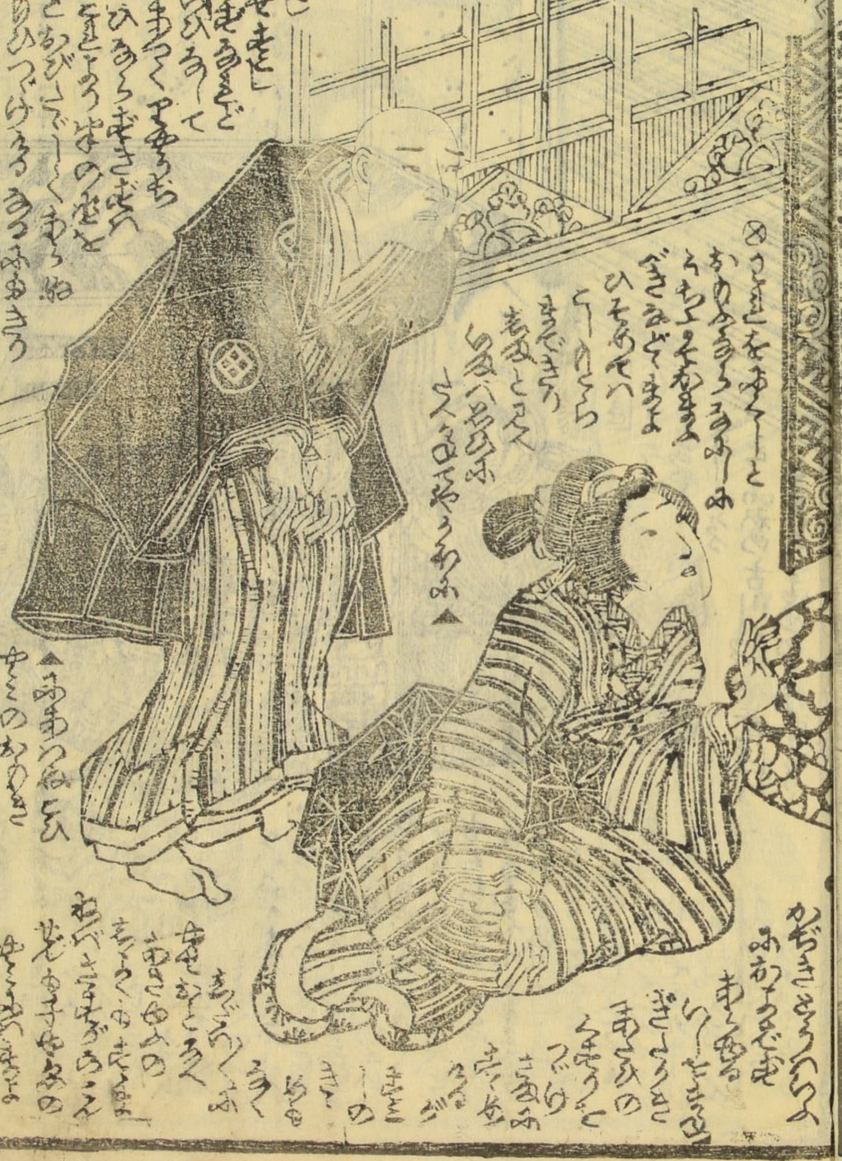
□稿本いざとて消しぬ。

□慶應三丁卯初春

春霞樓秀賀誌

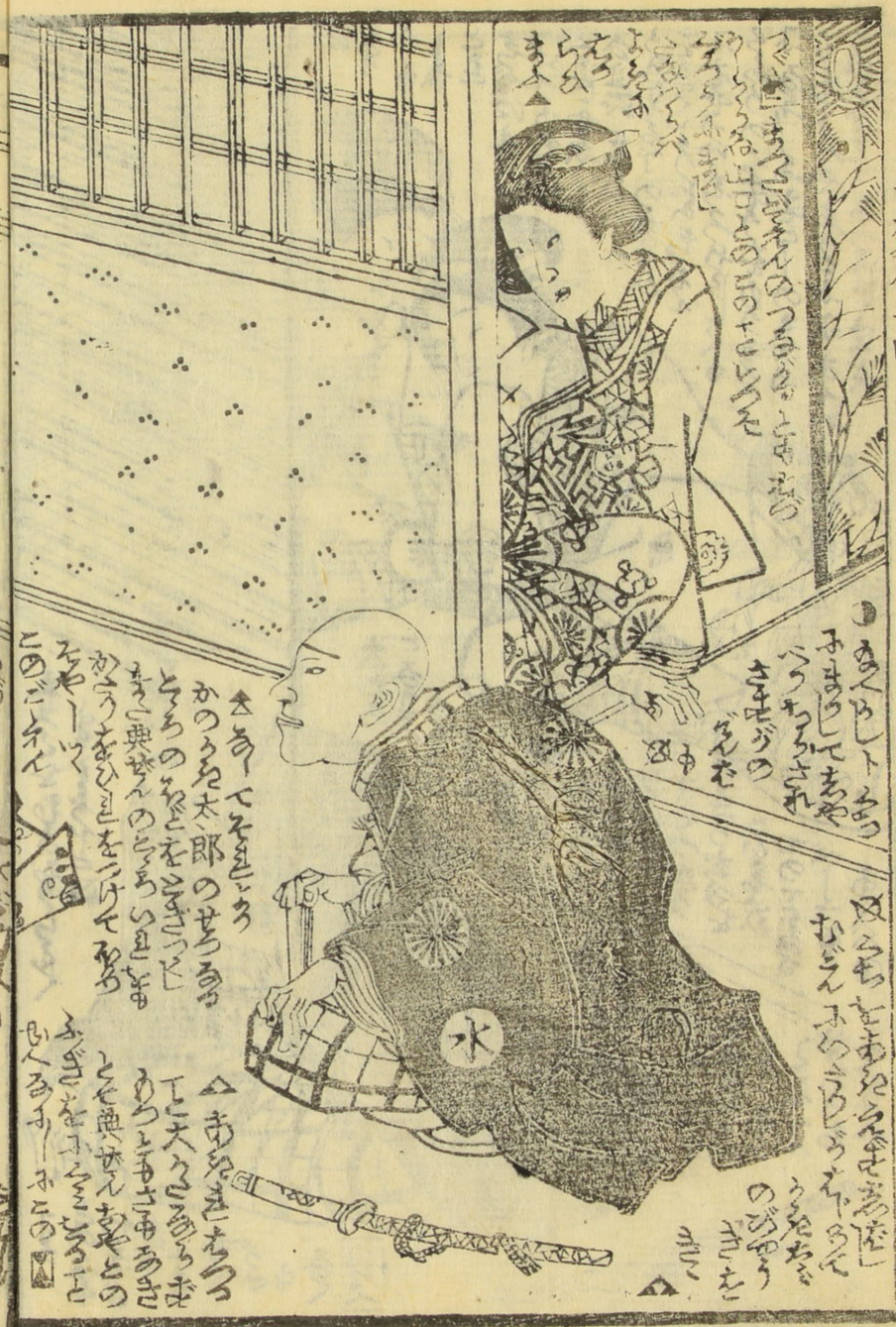


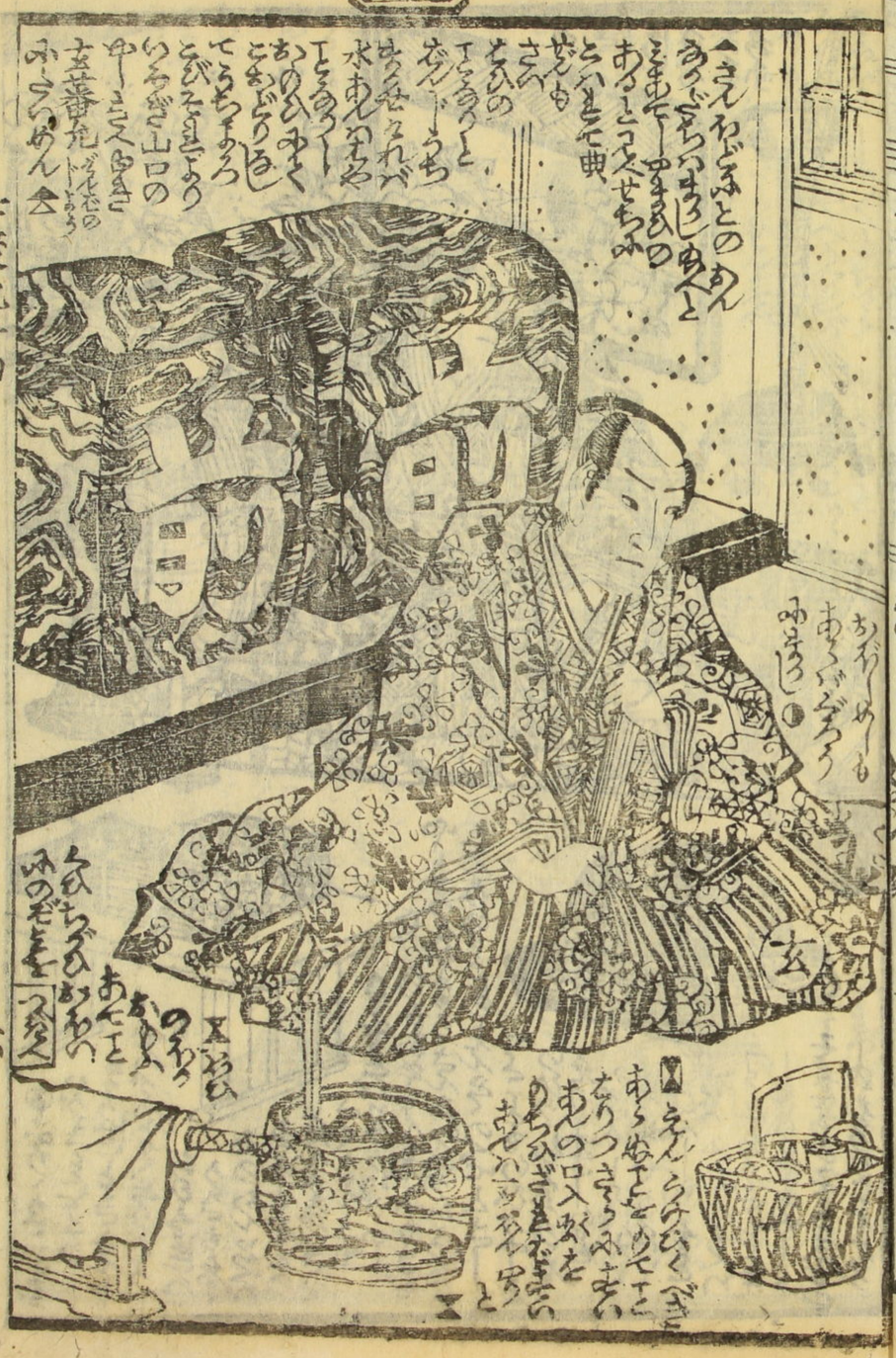
柿
木

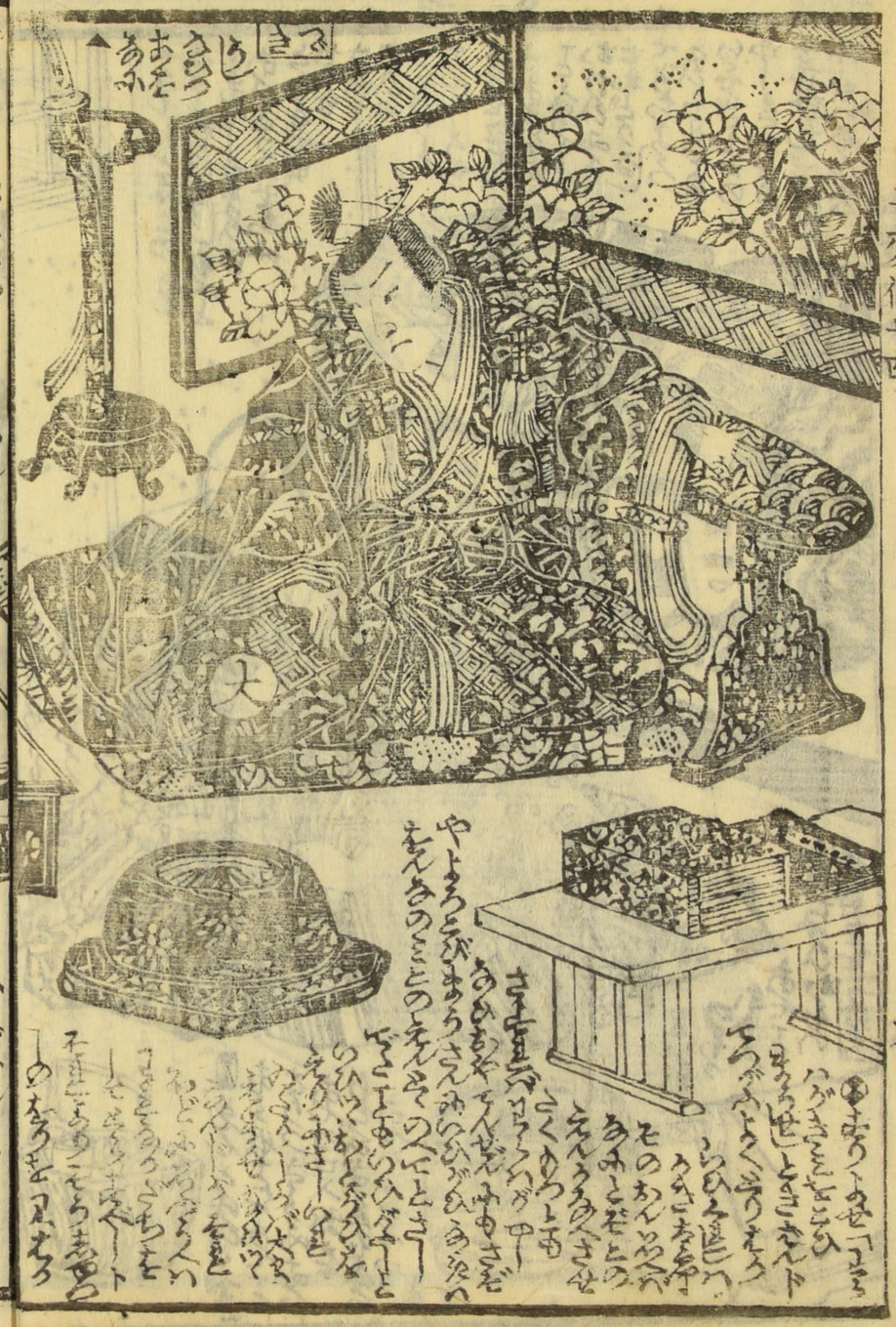

柿

典

水

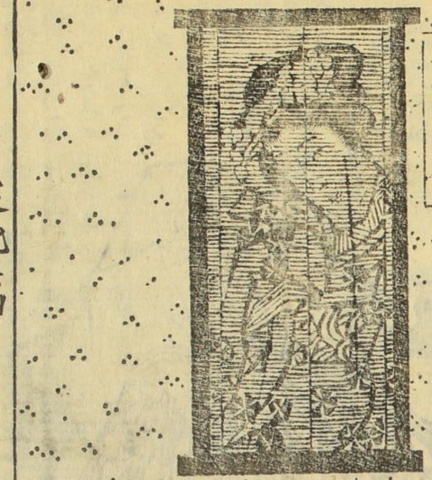

水


前
前
玄

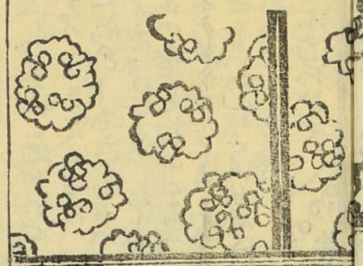


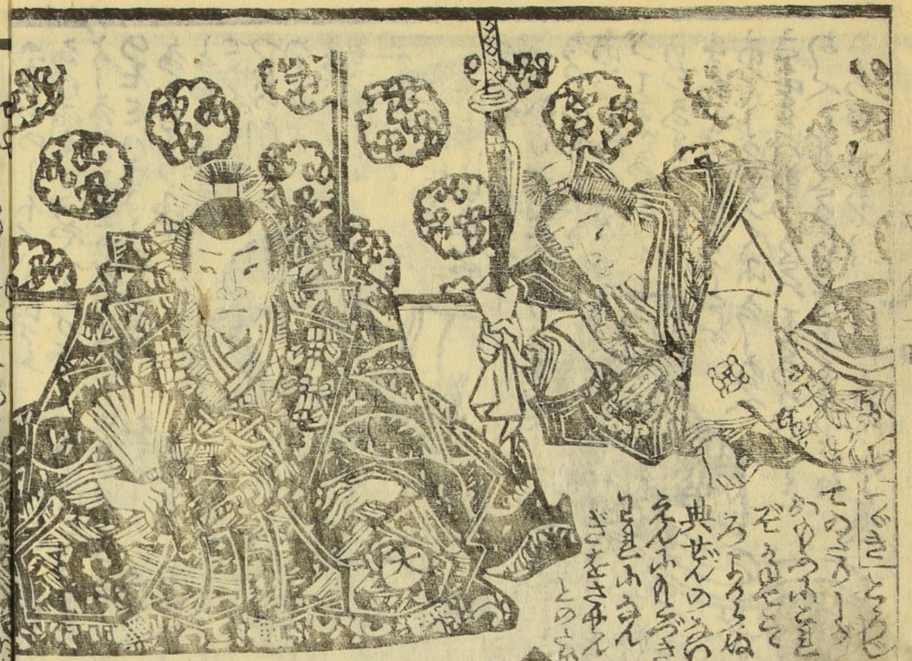
大

水

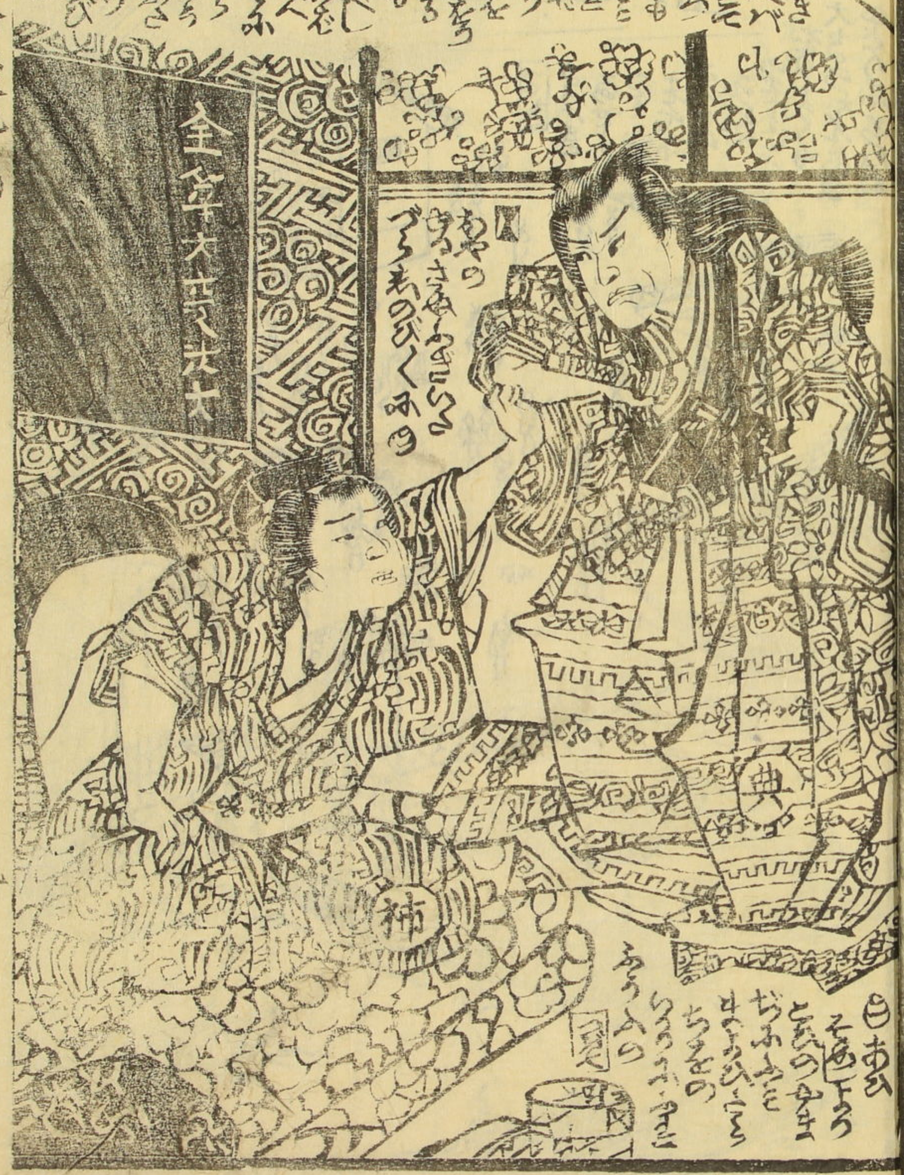


藻の花



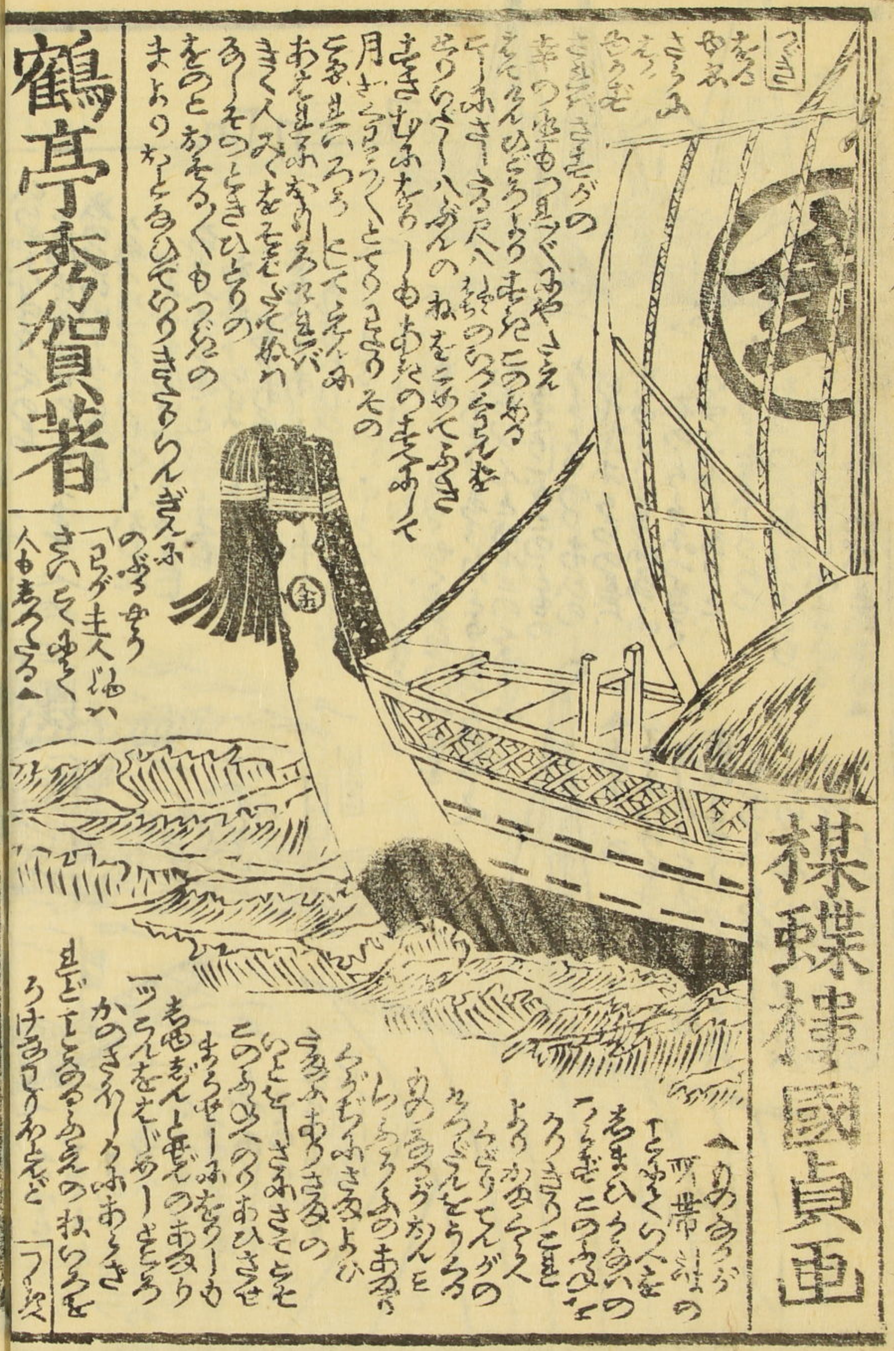


玉
半
典
神


金幸大吉大

鶴亭秀賀著

楳蝶樓國貞画



金華七變化

鶴亭秀賀著作
梅蝶樓國貞画

右ハ殊の外御評判宜鋪ゆゑ作者画工一世一代の新案新工夫をこらし
ごとに彫摺ホニ念を入古今ニ美本と做トシテ看官競ニ高覽をねがふと云

水鏡山鳥奇譚

初篇ヶ 鶴亭秀賀作
三篇迄 一鶯齋國周画

假枕巽八景

初篇 假名垣魯文作
二篇 同 画

和哥紫小町文章

初篇ヶ 鶴亭秀賀作
追ヶ 出板 歌川國周画

金 地本双紙 問屋 金松堂 横山町三丁目 辻岡屋文助梓

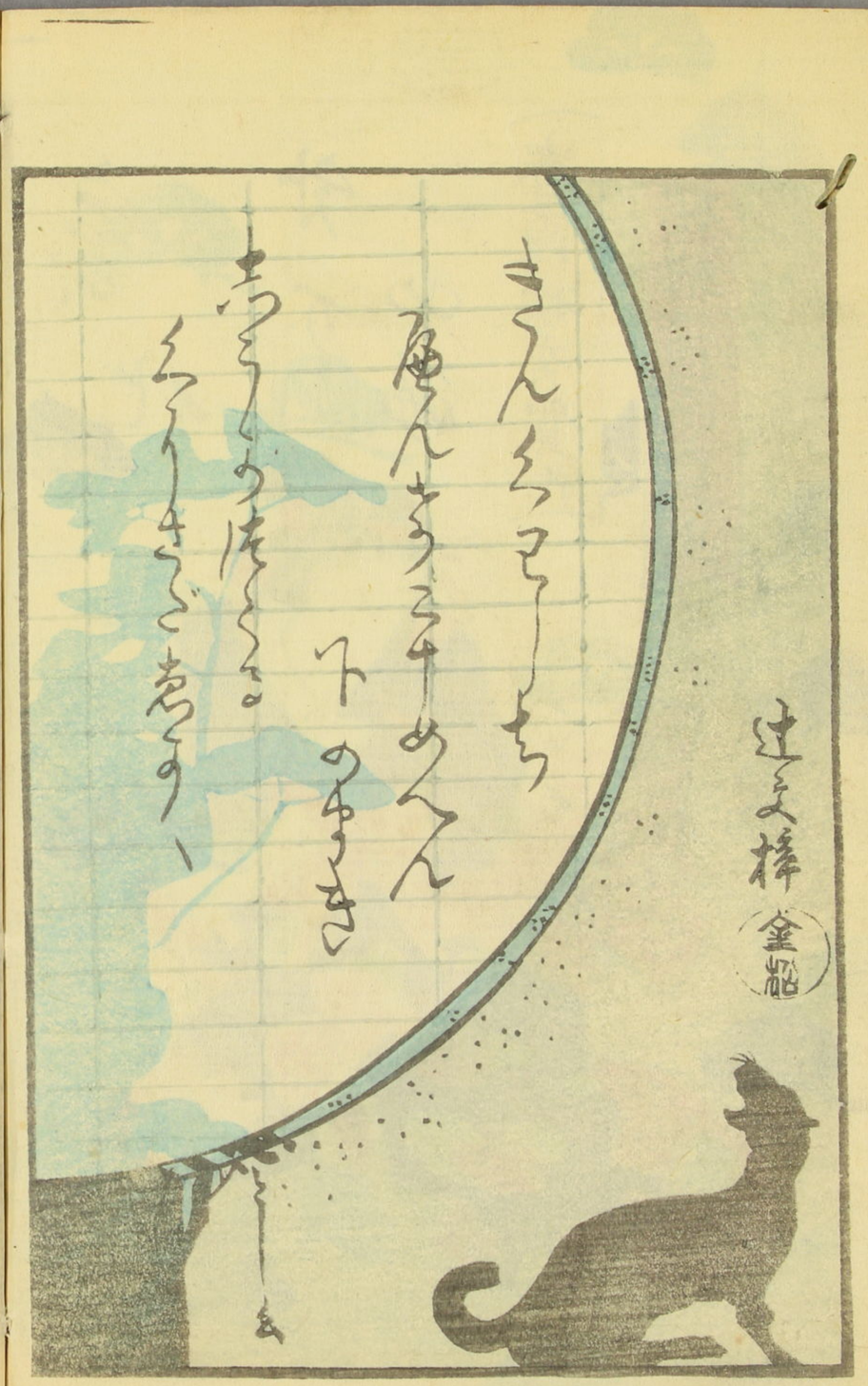
寛化分下の海

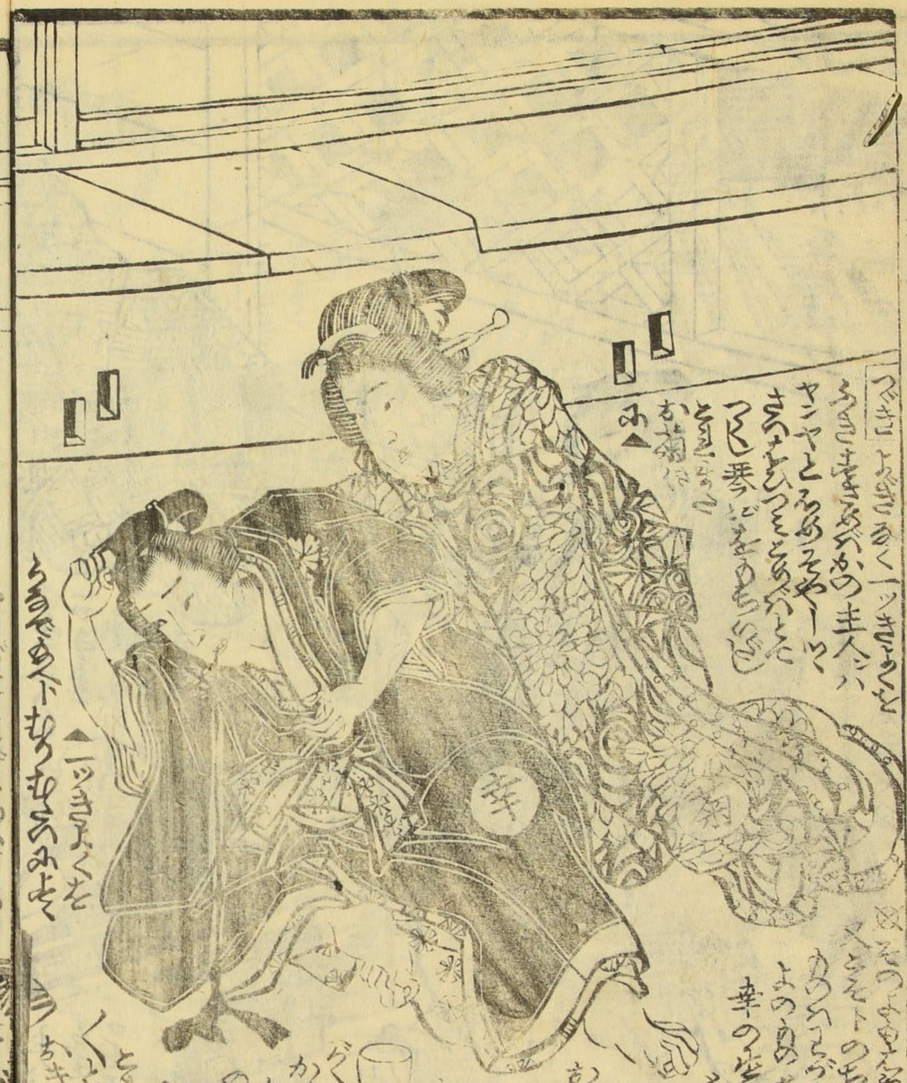
春霞樓秀賀作

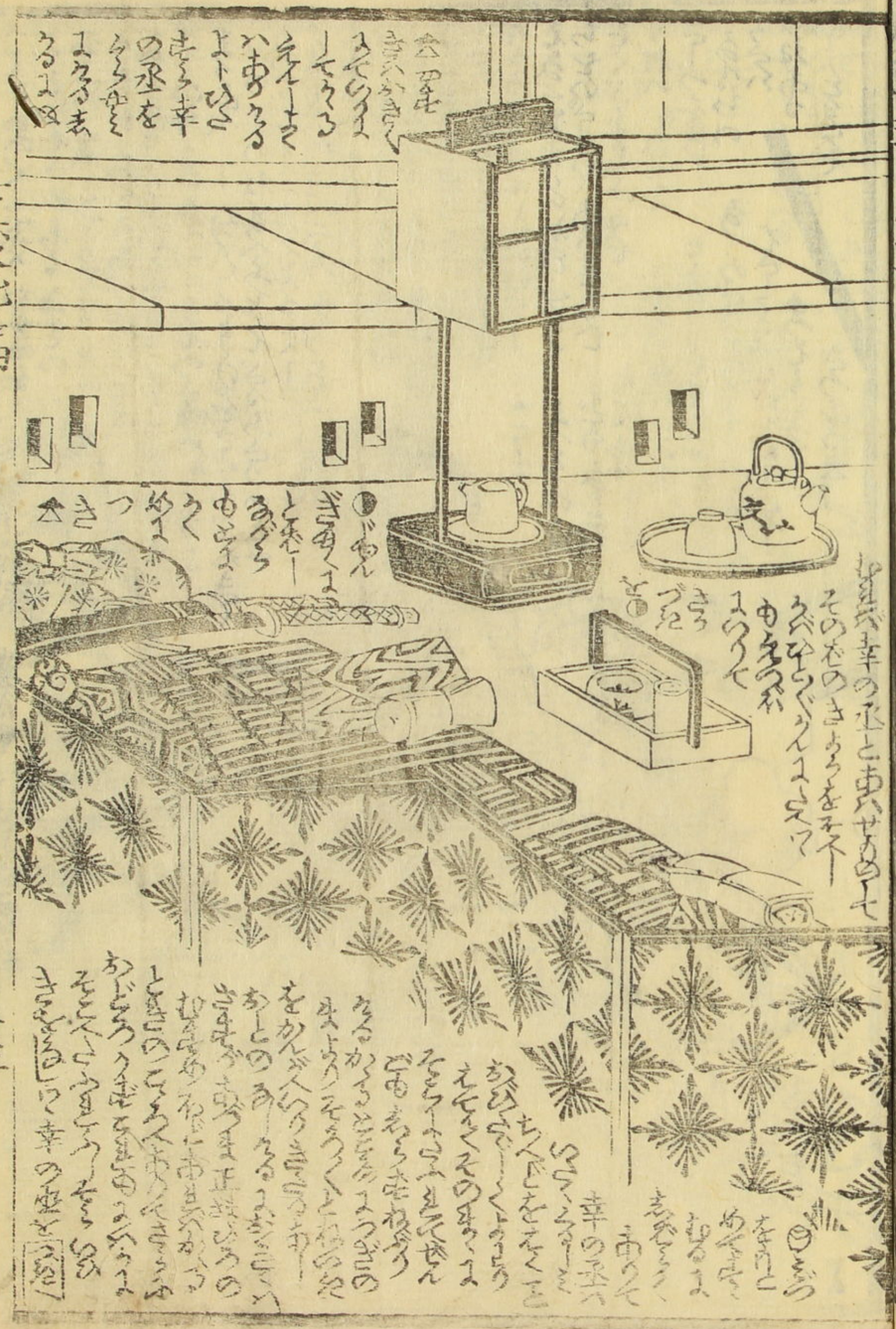
梅蝶樓國貞画

下巻

二の巻より
かんたんのあまり
きつたいるうち
さびのうさ
たちさんと
ならばおふう
とものとるくん
おんいでねがふ
るりいうでく
といひいてゆ
そでひき
くつまが
幸の丞へ
たドめ
て▲
▲のつあひのあたをとりるりと
おゆひいてよぎるくかのあく
あるいのつまでやれるのは
ていせんちうみて三
がいるりかくるとと
ろ人月かげまんく
とさしくと
みんざみへ
三十五六七
とゝゆる人がう
のよきをとと▲
▲ふう
おやけ
るりと
らん
びん
るうら
あを
ひげ
たん
めんとして
がんちう
いるどく
ひとくせ
あるげみえ
をんるどもみ
かさひひらし
つくいせん
さうしらかくと
するようさち
まちみえ
がれをつう
こまんく
あん
ふう
一発人


きんたつとしたち
風んさうこすめんん
下
のまつき
しりきぐ者すゝ
辻文梓
金船





幸

幸

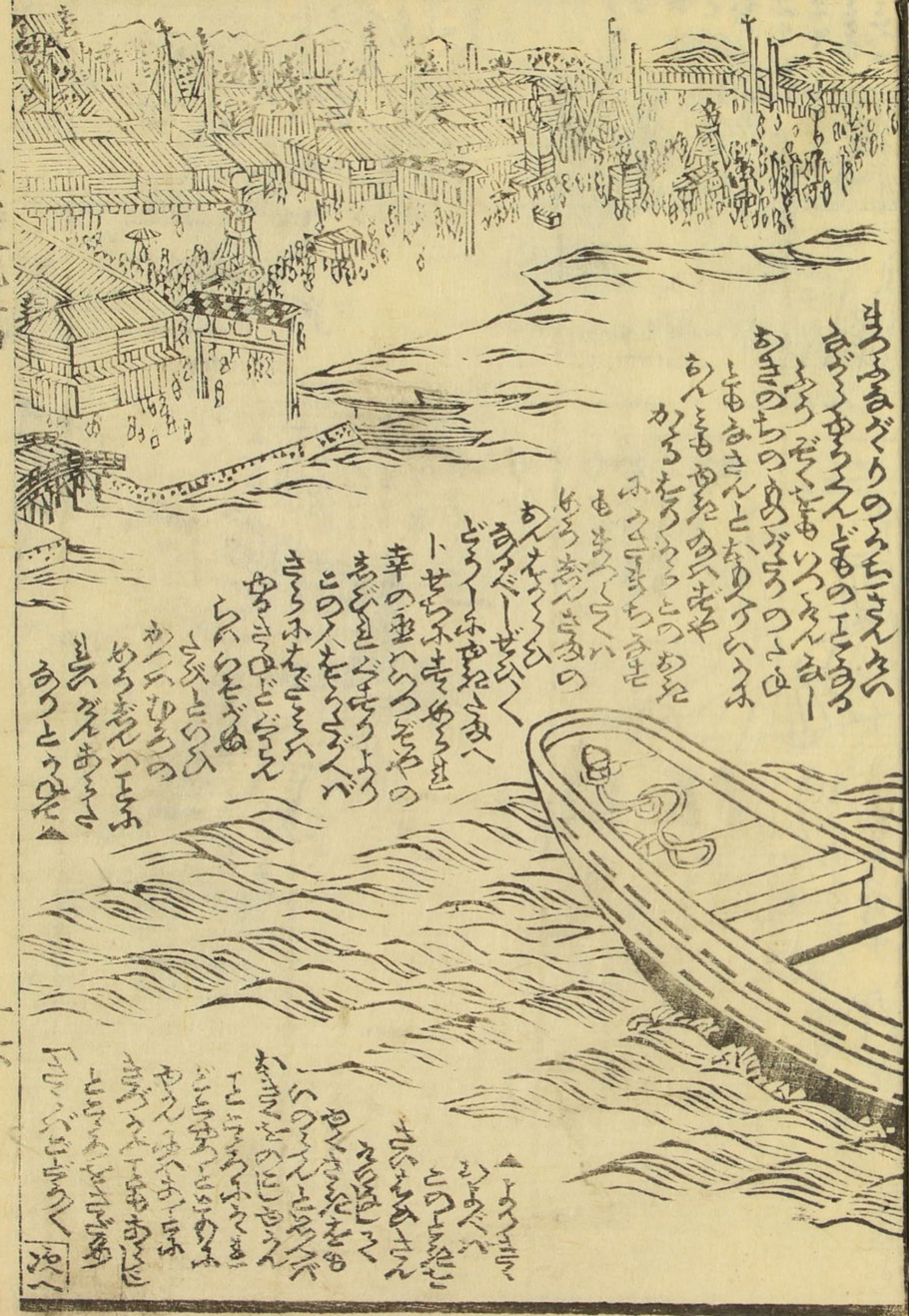
つゞき

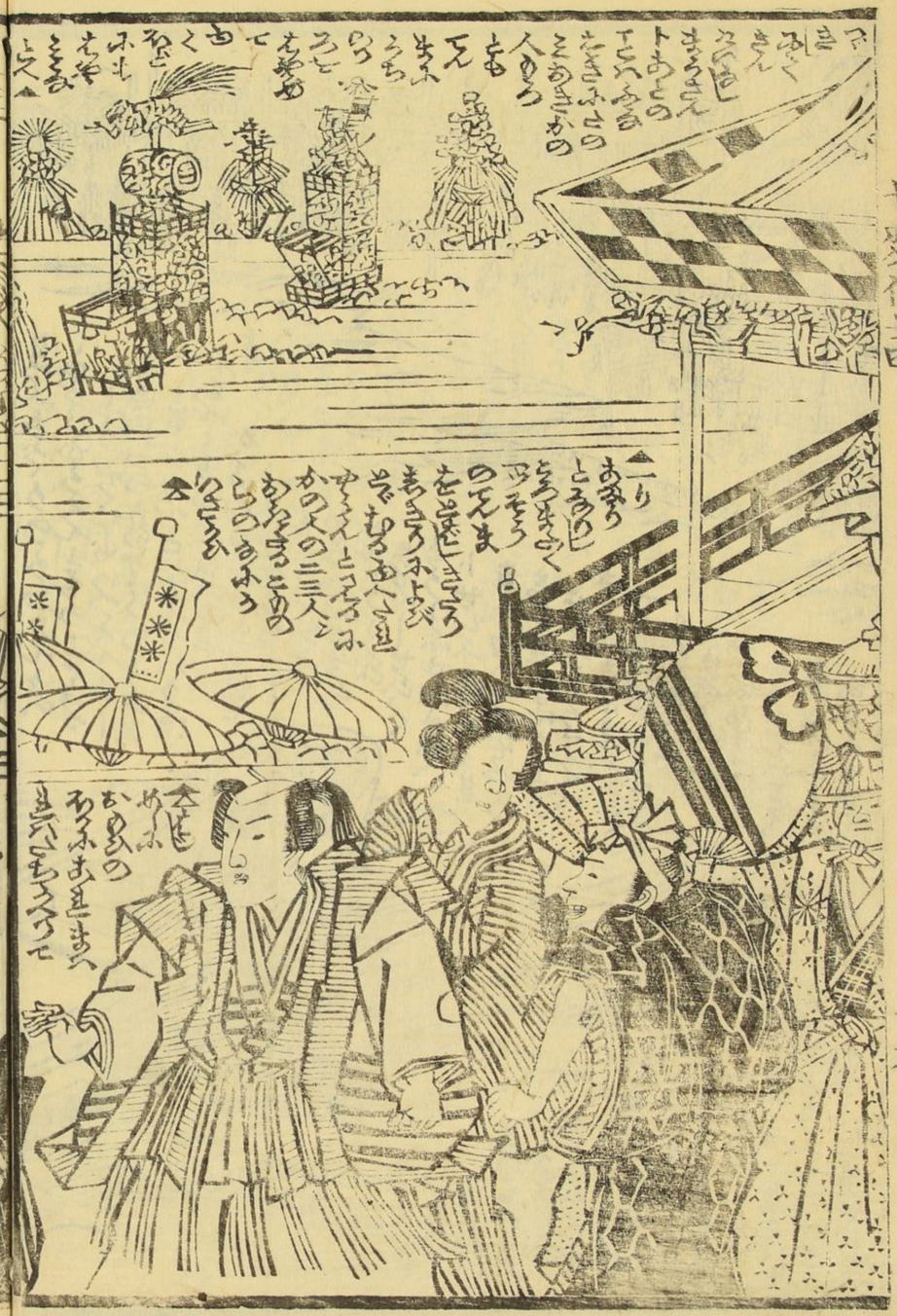
お菊

幸之丞

左門

三吉
幸之丞





幸

つづき
大内
家
元臣

江戸人形町通ノ
飯島啓三郎謹製
武田高月
大貝一百穴
小貝二十銅
中貝四十八銅

神仙
一角丸
氣つけ毒ノ小兒ヲ双ル諸病ニ以テ
調合所 上総國東金町 大野傳兵衛

周防染櫻模様 四編 五編 六編 貞雅作 國貞画
梅春霞引始 三編 讀切 魯文作 國周画
濡衣女鳴神 十編 讀切 秀賀編次 國貞画
遂来嶋堂 鬼儡師筆操 初篇 追出板 魯文作 國綱画
道外江戸名所 六編 五十番續 廣景画

文
地本双紙問屋 金松堂
横山町三丁目
辻岡屋文助梓